柴生田先生を送る

昭和四十七年四月、明治大学ご在職中の先生をわが国文学科にお迎えしてから早いもので、はや満八年の歳月が過ぎ去った。先生は昨夏定年に達せられ、この三月をもってご退職されるので、本誌も特集号を編み、お送りすることになった。

先生とご因縁の深い明治大学から本学にお迎えするについては、いささかむずかしいことがあった。先生の御考えは、明治大学を退かれた後、教壇には一切立たないという御決心だったようで、われわれの要請も容易に受け入れられないような情況であった。しかし当方としては、上代文学の専門家をお迎えしなければならない事情があったので、その間のことも縷々熱心に説明して、ついに本学への就任のご快諾を得た時のよろこびをその交渉にあたった私はつい昨日のことのように思い出すのである。

爾来、謹厳にして温和な先生が、大学院・学部の学生の教育に熱心に取り組まれたことはありがたいことであった。上代文学を専攻して卒業論文に纏める学生が二十数名に上る盛況を呈するようになったのもひとえに先生の熱意あふれるご教導の賜というべきであろう。

先生がアララギ派の歌人で、歌集『入野』によって昭和四十一年度の読売文学賞を受賞せられたこともよく

知られている。昭和十六年に刊行された第一歌集『春山』以下の諸歌集に見られる清澄な歌風が示すように、先生の御人柄は澄み通るように真摯にしてまた闊達である。権力にこびず不正に妥協しない強い一面、温厚な面も兼ねそなえておられ、接する人々を魅了して止まない。

今、後進に道を譲り、静かにこの学園を去って行かれるにあたって惜別の情洵に切なるものがある。ご退任後は、悠々自適、ご専攻の上代文学の研究に精進されるとのことである。今後ともますますご健康に留意され、末永く長寿を保たれんことをお祈りする次第である。

簡単ながら以上をもってご送別のことばとする。

山　田　巖